

M-GTA 研究会 News letter no.39

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grouned@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

＜目次＞

◇第49回研究会の報告

◇近況報告：私の研究

◇第50回研究会のご案内

◇編集後記

◇ 第49回研究会の報告

【日時】2009年5月30日（土）

【場所】立教大学（池袋キャンパス） 立教大学（池袋）7号館7101教室

【出席者】82名

＜会員（48名）＞

・秋山恵子（ルーテル学院大学）・浅野 正嗣（金城学院大学）・阿部正子（筑波大学）・安藤晴美（埼玉医科大学）・家吉望み（茨城県立医療大学）・池田浩子（自治医科大学）・伊藤祐紀子（北海道医療大学）・歌川孝子（新潟大学）・内田紀子（大和市日本語指導員）・大石あき子（東京福祉大学）・大澤千恵子（淑徳大学）・大見サキエ（浜松医科大学）・沖本克子（広島大学）・小倉啓子（ヤマザキ動物看護短期大学）・加藤基子（埼玉医科大学）・北岡英子（神奈川県立保健福祉大学）・小嶋章吾（国際医療福祉大学）・坂本智代枝（大正大学）・佐川佳南枝（立教大学）・櫻井美代子（東京慈恵会医科大学）・佐鹿孝子（医科大学）・塩谷久子（広島国際大学）・高橋由美子（浜松医科大学）・竹下浩（ベネッセコーポレーション）・田沼美杉（自治医科大学）・丹野ひろみ（桜美林大学）・茶谷利つ子（新潟青陵大学）・塚原節子（岐阜大学）・長住達樹（西九州大学）・長山豊（金沢大学）・成木弘子（国立保健医療科学院）・新鞍真理子（富山大学）・林葉子（お茶の水女子大学）・日野浦裕子（みどり病院）・平澤一郎（ルーテル学院大学）・深澤信枝（ルーテル学院大学）・保正友子（立正大学）・前田和子（筑波大学）・真砂照美（広島国際大学）・松繁卓哉（国立保健医療科学院）・松戸宏予（コロンビア大学ティーチ

ヤーズカレッジ日本校)・三澤久恵(学校法人後藤学園)・水戸美津子(自治医科大学)・宮崎喜久子(京都大学)・三輪久美子(洗足学園短期大学)・山崎浩司(東京大学)・横山登志子(札幌学院大学)・渡辺恭子(日本赤十字広島看護大学)

<西日本 M-GTA 研究会(1名)>

・廣瀬真理子(関西学院大学)

<非会員(33名)>

・青木智恵(聖学院大学)・石黒歩(慶応義塾大学)・稲垣尚美(横浜国立大学)・宇賀神恵理(埼玉医科大学)・大島聖美(お茶の水女子大学)・大沼いづみ(広島国際大学)・倉田貞美(浜松医科大学)・栗田茂樹(ルーテル学院大学)・小林恵子(新潟大学)・小林理恵(新潟大学)・斎藤明香(日本赤十字看護大学)・斎藤まさ子(新潟青陵大学)・芝山江美子(高崎健康福祉大学)・清水小織(国際医療福祉大学)・白野絹子(新潟大学)・巽あさみ(浜松医科大学)・坪川麻樹子(新潟医療福祉大学)・鳥居千恵(浜松医科大学)・中里和弘(大阪大学)・西川正史(ルーテル学院大学)・萩原瑞希(ルーテル学院大学)・箱石文恵(埼玉医科大学短期大学)・真柄悦子(新潟市役所)・増田早苗(ルーテル学院大学)・松尾浩司(浜松医科大学)・松下年子(埼玉医科大学)・松本すみ子(東京国際大学)・三木明子(筑波大学)・茂川ひかる(浜松医科大学)・森實詩乃(国際医療福祉大学)・安原千賀(聖学院大学)・山崎律子(福岡大学)・五十公野由起子(浜松医科大学)

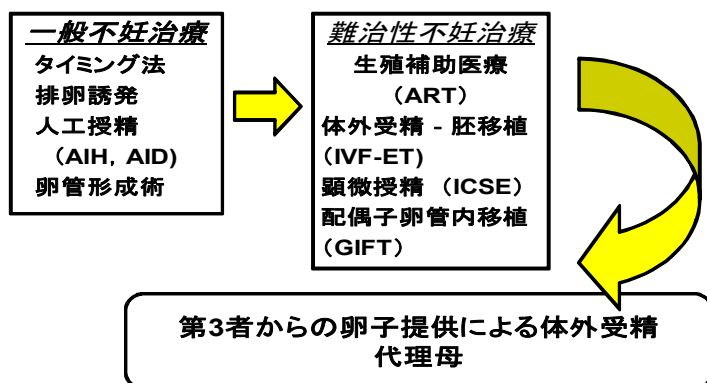
【第一部 ペアセッション】

* はじめに阿部正子さんの PowerPoint によるプレゼンテーション、その後、SV 木下先生との対話形式でのやり取りが行われた。

阿部 正子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学系)

「不妊治療の終止をめぐる女性の不妊という事実の認識変容プロセス」

不妊治療の進歩から適応範囲の拡大へ



不妊女性が置かれている状況

- ・ 生殖医療の進歩
⇒不妊は治すべき『病気』として生起
- ・ 時間や費用がかかるが、他の治療に比べ成功が保証されない
- ・ 施設や医師により方針が異なる
- ・ 治療の安全性が確立していない
- ・ ゴールや見通しが立たない

先行研究

体外受精を受療している不妊女性の

治療継続の経験的プロセス

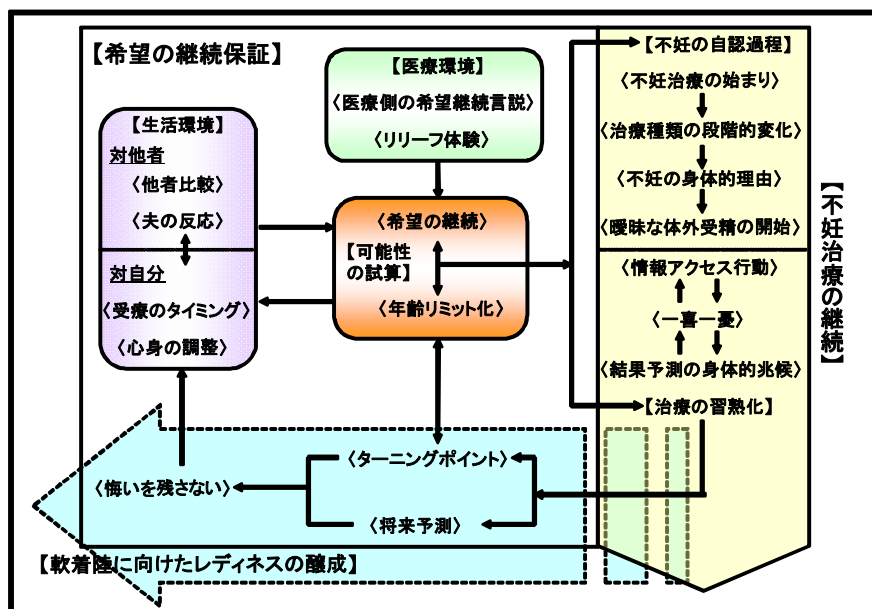
目的: 体外受精を受療している不妊女性の治療継続の経験的プロセスを明らかにする

対象: 体外受精を2回以上受け、過去に出産経験のない女性不妊症の既婚女性 14名

データ収集: 半構造化面接法

分析方法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

体外受精を受療している不妊女性の治療継続の経験的プロセス



<先行研究の発展的な位置づけ>

治療終止の困難性 妊孕性の限界が近づいた女性の不妊という事実の認識変容プロセス

不妊治療の終止を意識しながら受療を継続している女性たちが経験している『治療終止の困難性』の様相を明らかにすることを目的とする

<研究の意義>

不妊治療の終止に迷う当事者の内的体験を明らかにすることができれば、治療の終止時期について迷う不妊女性やカップルの心理的準備性の向上を支援するための指針が得られる

<研究方法>

- 研究デザイン： 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた質的研究
- 研究参加者： 不妊治療に通う40歳以上の既婚女性20名
- データ収集方法： 半構造化面接法、了解を得て録音し、逐語録を作成

<インタビューガイド、分析テーマ、分析焦点者>

インタビューガイド

- 1)結婚から不妊治療を開始し、現在に至るまでの経緯
- 2)不妊治療の継続と治療をめぐる意思決定について
- 3)夫、医師、家族や友人との関係
- 4)現在の治療に対する思い(治療終止のめどに関する考え)

分析テーマの設定

不妊女性がそれでも治療を継続するプロセス

分析焦点者

不妊治療クリニックで治療中の40歳以上の既婚女性

<現象特性>

- 常に止める決断を先延ばしにしていく

⇒猶予していくダイナミズム

ギャンブル？
投資？

- せめぎあっているような感じの動き

⇒綱引きみたいな？

⇒いつも中心点をまたぐ。そこに引っかかるとゲームが終わっちゃう…

「それでも」の意味

出来るだけ綱引き的な、違う逆の方向に引っ張ろうとするような条件とか関係をみていったら…

【自分への説明責任の増大】

定義: 結果がでないままに不妊治療を続けていることへの説明責任が、時間の経過とともに強く意識されること

治療しているんだけどできないんだからしょうがない。もし治療していなかったらば、“もしかしたら治療していたらできたかもしれない”って、もういつまでたっても悩んじゃうんですね。やってダメだったらしょうがないと思うけど、やらなかったらば、“もしかしたら”って、よけい後悔の日々みたいな。その後悔を減らすために自分に対する免罪符みたいな感じですかね。

《理論的メモ》

* 自分に対して説明がつかないと治療を止められない

⇒時間の経過とともに増大する。加えて、治療を続けるために仕事をしていないことも、女性にとっては後ろめたさになっている場合もある。よって、説明責任には「子どもが出来ないこと」以外にも治療によって我慢しているもの、諦めざるを得なかったものなどに対する葛藤を抱えている。

【自分への説明責任の増大】の対極例

「あきらめる……。どういう状態だろう。それこそ不妊治療を上回るほどの自分が大病するとか（笑）。もうできないというようなね。もう、それどころじゃないってような大病をするとか、そういうふうになればもうそうじゃなくなっちゃいますよね。そうなれば、治療も…なんて思ったりするけどね。」

《理論的メモ》

対極例では、不妊治療を止められるのは外的な力（自分ではどうしようもない）に頼るしかないと語っている。これは、他者が説明責任を負ってくれるシチュエーションであるが、【自分への説明責任の増大】というのは、それくらい自分ではどうにもならない拘束力を持つのかもしれない。

<分析を終えて…>

- ・ 分析テーマ: データに流れている動き(プロセス)
- ・ 現象特性: 分析の羅針盤的存在
- ・ よい概念＝解釈の深さ“なぜそこに着目するのか”
- ・ プロセス性のあるものをみつける＝動きへの集中
- ・ 絶えざる比較と類似の思考＝「相方探し」
- ・ 概念を作りながら同時進行でカテゴリー候補を考え、概念、カテゴリー同士の位置関係や

動きを図示し、文章化する⇒説明や予測が可能となっていく

- ・ 結果図：図自体が目的ではなく、何かをパワフルに説明できることが重要
- ・ 発想の習慣化＝帰納と演繹の相互作用

《木下先生との質疑応答の要約》

1. 分析テーマの設定

今回の研究が先行研究とどう違うのかをもう少し意識した分析テーマになってもよかったのではないか。今回は先行研究¹の分析焦点者よりも深刻度の高い方を対象にしており、それが“それでも治療を継続するプロセス”という表現で表されているのは分かる。しかし、もう少しどの局面に焦点を当てているのか、そこをはっきりとさせると結果の応用に反映できる。“それでも”のニュアンスを価値転換できるような分析テーマを考えられないだろうか。欲しいものが近いところにあるような…もう少し深いところを捉えた表現にすると、この段階の人たちを支援する視点が得られるはずである。

質疑応答での意見としては「奇跡にかけるプロセス」や「少ない確率にかけるプロセス」、また、先行研究にある概念名をテーマに活用した「可能性減少時の経験的プロセス」などが提案された。さらに、“それでも”という表現に否定的なニュアンスを感じるという意見のもと、“継続への期待と戸惑いのプロセス”はどうかという提案が出されたが、木下先生からは「絞り込みすぎずにもう少しファジーなほうがいい」との返答があった。

2. 結果の応用

分析テーマに標榜しているだけの分析結果(内容)になっているか？そうした問いに答える場合に、“分析焦点者”に有効な助言・かかわりを見出すことや、実践の中で有効であると提示できることが重要だと考える。たとえば、不妊治療を続ける中で家族など周囲の人たちとの相互作用がいろいろあると思うが、特に配偶者との関係の中にいろんなものが見えるのではないか、その部分にもう少し焦点をあてて掘り下げていくと有効な示唆が得られる結果となるかもしれない。そうした視点からみたら、コア概念〈自分への説明責任の増大〉は自分で一定の判断をしやすくなる可能性を示しているだろうか？患者本人がそれまでの治療プロセスを踏まえて何らかの判断ができる強みを見出せれば、そこへどういう働きかけができるのかを考えやすい。さらに、当事者(分析焦点者)に誰がどの局面でかかわるのがいいか、そうした視点を提供できる結果になっているかどうかは非常に重要である。「カウンセラーからみたらどう使えるか」「医師からみたらどう使えるか」という視点でも結果を吟味し、活用の仕方を見出すことが重要である。

¹ 阿部正子：体外受精を受胎している不妊女性の治療継続の経験的プロセス。日本生殖看護学会誌，第4巻第1号，34-41，2007

3. 現象特性

現象特性は発想を呼び起こすためのものである。この場合には、続ければ続けるほど脱出が難しくなるような場面を想定してみるとどうか。また、綱引き状態でもあるが、それが続けられながら深みに嵌っていくような…ある状況にはまって(価値的なニュアンス)しまっているともいえる。不妊治療はよく“出口の見えないトンネル”と称されるが、この場合は「出口の部分」を含めた動きが想定されると思う。

《感想》

発表資料を作成しながら、分析していた当時を思い起こしました。私自身も「トンネルにはまり込んだ」感じで、いつ抜けられるのか焦りと不安を抱えつつ、それでも期限が迫ってくるのでひたすら分析を続けるといった毎日でしたが、やり遂げた後の充実感は何にもものにも代えがたいものでした。

さて、今回は話題提供者としてこのような機会を頂き、予想以上の成果を得ることができました。まずは、自分の中にある違和感が何によって生じているかが明らかになったことです。私が感じていた違和感とは、結果の内容から臨床へ提示できる具体的な示唆がいまひとつ明確にならないという不全感のようなものでした。木下先生に「分析テーマが標榜しているだけの内容になっているか」と問われたとき、自分が感じていた違和感の正体が見えた感じがしました。論文を書いている最中、考察がすんなりと出てこない、“あっそうか”といった腑に落ちる感覚や、具体的な支援ということが自然に思い描かれないことに苛立ちや「何でだろう」という感覚を拭いきれなかったことを思い出しました。さらに、分析焦点者を中心に行われる相互作用について、結果にあまり反映されていないことも、“説明だけでなく予測にも有効である”という M-GTA の強みが十分に発揮できていない原因だということが、今回のセッションで分かりました。

こうして分析過程を振り返り、修正の機会が得られたおかげで違和感を払拭することが出来そうです。発表終了後に大勢の方からご自分の研究にも通じるところがあるという言葉を頂き、“止めるに止められない”という状況は普遍的な現象なのだとということも分かりました。そうした仲間の存在を心強く感じると同時に、有益な示唆を頂き、大変感謝しています。ありがとうございました。

(筑波大学大学院人間総合科学研究科:阿部正子)

【第二部 研究報告】

藤原正仁(東京大学大学院情報学環)

「コンテンツ産業におけるインターンシップを通じた学習過程」

0. 研究の背景

①コンテンツ分野におけるインターンシップの取り組み

人類の叡智の結晶である知的財産としてのコンテンツ（例えば、ゲーム、アニメ、映画、マンガ、音楽など）は、秀逸な作品性が世界的に高く評価され、文化的価値を創造している。また、原作などのリソースのマルチコンテンツ化やグローバル化、デジタル化やネットワーク化によって流通量が大幅に増加し、経済的価値をも創造しており、日本経済を牽引する産業として期待されている。このような中、コンテンツを戦略的に創造・保護・活用することで、経済的価値をさらに高めていけるようなプロデューサーの不足が指摘されており、その育成が知的財産戦略を柱とする近年の国家的政策として推進されている。

そこで、T大学では、Cプログラムを2004年度～2008年度に開設し、わが国におけるゲーム・アニメ・映画などのデジタルコンテンツ創造の実績をふまえて、さらに優れたデジタルコンテンツを生み出すことのできる人材の養成を行ってきた。本プログラムは関連研究科やコンテンツ産業界などの協力のもとに運営され、とりわけ産学連携教育が重視された。産学連携教育の要となる「インターンシップ」（選択必修科目）に参加した履修生は、4年間（2005年度～2008年度）で30名に達した。

本インターンシップ・プログラムは、事前研修・実地研修・事後研修から構成された。事前研修では、コンピュータを用いたキャリアガイダンスシステム（CACGs: Career Assisted Computer Guidance system）を利用し、キャリアカウンセリングを受けることにより、自己理解を深めた。また、コンテンツ産業の労働市場やキャリア形成に関する講義、インターン先に関する業界研究、ビジネスマナー研修やリスクマネジメント研修等を実施し、インターンシップにおける目的の明確化と行動計画の具体化を行い、実地研修の準備に備えた。インターン先での実地研修では、アニメ、ゲーム、映画、音楽、出版、ソフトウェア開発会社、コンテンツ業界団体などにおいて、広報・宣伝・プロモーションの企画や関連実務、市場調査、出版編集、携帯電話ゲーム開発などを実施した。事後研修では、実地研修での学習成果を振り返り、キャリアデザインに結実させるためのワークショップを実施した。

②インターンシップの制度化と研究の動向

1997年9月18日、インターンシップの望ましい推進の方向性について、早急に政府としての基本的な考え方を明らかにするために、文部省、通商産業省、労働省（いずれも当時）の連名によって「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方（以下「三省合意文書」）」が発表された。本文書において、インターンシップを「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」として幅広く捉えることとし、明文化された。インターンシップが制度として成立以降10年余りが経過し、多様なインターンシップが展開されてきている。

このようなインターンシップの多様な展開の淵源は、三省合意文書が発表される以前の1997年6月から、文部省、通商産業省、労働省において、それぞれの観点から多面的に検討されたインターンシップに関する研究会の開催まで遡る。

文部省は、1997年1月24日に「教育改革プログラム」を策定し、教育改革の一環として、

社会の要請の変化に機敏に対応すべく、産学連携による人材の育成を重視し、「学生の高い職業意識を育成するため、インターンシップの導入の在り方について、平成9年度より検討を進める」ことを示した。これを受けて、文部省では、同年6月より「インターンシップ推進のための産学懇談会」（座長：木村孟東京工業大学長）を開催し、高等教育機関および産業界の関係者ならびに有識者による懇談を行った。本懇談会では、インターンシップを推進することによって、カリキュラムの多様化を通じて教育内容・方法の改善充実に資するとともに、創造性豊かで時代の変化に柔軟に対応できる高い職業意識を持った人材の育成を図るため、高等教育機関におけるインターンシップの在り方やその推進方策についての検討が行われた。

通商産業省では、1997年6月、中部通商産業局に「インターンシップ導入研究会」（アドバイザーボード座長：加藤延夫名古屋大学総長、ワーキンググループ主査：森正夫名古屋大学副総長）を設置し、インターンシップの普及促進を図るため、インターンシップに先駆的に取り組んできた東海地区を対象に、導入に向けての具体的な問題点および課題の抽出ならびに推進方策について検討した。本研究会では、「東海地域におけるインターンシップ導入に当たっては、『21世紀を担う人材の育成』を目指し、産学連携による人材育成の観点から教育の一環として実施されるべきであり、インターンシップは、就職・採用活動と直接的に結びつくものではなく、教育の変革、産業の活性化を視野に入れた産学連携による教育の実践である」と指摘し、教育的観点を強調した。

労働省では、1997年6月より「インターンシップ等学生の就業体験のあり方に関する研究会」（座長：諏訪康雄法政大学社会学部教授）を開催し、主に若年者の職業問題という観点から検討が行われた。その結果を報告書（中間まとめ1997年9月、報告書1998年3月）に取りまとめ、「若年者の職業問題という観点からみたインターンシップの意義としては、学校と産業界等が連携して学生の高い職業意識を育成し、主体的な職業選択と専門能力の向上のための多様な機会を提供することにより、次代を担う学生の職業人としての成長を社会全体として支援していくという点が重要である」とし、職業教育の重要性を指摘した。

以上のとおり、三省によるインターンシップの概念は、いずれも産学連携による人材育成として形成されているが、特筆すべきは教育的観点が重視され、三省合意文書にも継承されていることである。これに付随するように、インターンシップ研究も、多様なインターンシップの展開に伴って事例研究を中心に数多くの知見が蓄積されてきたが、教育的観点から捉えてきたことにより、学習的観点到注目されることは少なく、多角的な検討が十分なされてこなかった。

そこで、本研究では、コンテンツ産業でのインターンシップに参加した修士課程11名の学習過程を分析することにより、教育的示唆を得ることを目的とする。

1. M-GTAに適した研究であるかどうか

次の3つの観点から、本研究はM-GTAに適していると考えられる。①インターンとインター

ン先指導者等、インターンと社会的実践という社会的相互作用に関係している、②ヒューマンサービス領域、とりわけ社会的実践を通じた教育・学習領域である、③インターンが
いかに学習していくかというプロセス的性格を持っている。

2. 研究テーマ

これまでのインターンシップの先行研究を渉猟してみると、実践的・事例的な研究が多く蓄積されているものの、理論構築が遅れている状況にある。具体的には、制度研究、評価分析、意識調査などが蓄積されてきているが、制約された実践的学習状況において、いったいどのようにして個々に応じた適切なカリキュラムや教育的な配慮を適確に見定めているというのだろうか。また、実際に学生たちがどのように学び、自らのキャリアをデザインしているのだろうか。

以上の問題意識のもと、本研究は、コンテンツ産業でのインターンシップに参加した修士課程11名の学生を分析対象として、インターンシップにおける彼・彼女らの学習過程を分析することにより、教育的示唆を得ることを目的とする。

3. 現象特性

インターンシップを通じた学習過程を解明するためには、教育者からのアプローチではなく、学習者からのアプローチが有効である。インターンシップを通じた学習は、インターン（学習者）と社会的文脈（状況）、あるいはインターンと特定他者（インターン先指導者等）との社会的相互作用の中で行われる。換言すれば、インターンが、インターンシップという制約された時空間の中で、状況や特定他者との関わり合いの中で学習していく現象と捉えることができる。

また、本研究における特徴的な現象特性としては、コンテンツ産業での現場特有の言語獲得プロセスとそれらの言語を使用した学習プロセスや、学生が思い描いていたコンテンツ産業に対するイメージと実際の現場との差異を認識していくプロセスが挙げられる。

4. 分析テーマへの絞込み

コンテンツ産業におけるインターンシップを通じた学習過程を分析することにより、どのように、何を学習し、いかにキャリア形成に結びついているか、また、インターンシップでの教育にどのような示唆が得られるのかを考察する。

5. データの収集法と範囲

分析対象とするデータは、インターンシップ終了後に履修生が提出した研修成果報告書をもとに収集した。研修成果報告書の内容は、①インターンシップ研修に参加した動機および目的、②インターンシップの目的の達成度、③インターンシップで習得したこと、④これまでの経験やスキルのインターンシップへの応用度、⑤自身に不足している点および

将来的なキャリアを築く上で必要な能力・スキル、⑥将来のキャリア設計へ与えたインターンシップの影響、⑦後輩へのアドバイスの7項目から構成される。

なお、インターンシップに参加した修士課程11名の学生の属性は次のとおりである。①平均年齢は、23.36歳（標準偏差0.88）、②性別は、男性8名、女性3名、③学年は、修士課程1年生6名、修士課程2年生5名、④インターン先業界は、アニメ4名、映画3名、出版2名、ゲーム1名、音楽1名、⑤インターンシップの平均日数は、28.64日（標準偏差14.27）である。

6. 分析焦点者の設定

本研究の対象は、コンテンツ産業（アニメ、映画、出版、ゲーム、音楽産業）におけるインターンシップに参加した修士課程11名である。修士課程に焦点を当てた理由は、Cプログラムは、修士課程相当レベルの人材養成を目標としているためである。また、修士課程の学生の中で、コンテンツ関連業界団体等でのインターンシップを実施した者がいるが、研究を目的とした実地研修（リサーチ・インターンシップ）であるため、プロデューサー養成を目的としたインターンシップと比べると、目的や実地研修内容が異なるため、分析焦点者から除外し、コンテンツ産業（アニメ、映画、出版、ゲーム、音楽産業）でのインターンシップに参加した学生に焦点化した。

7. 分析ワークシート（別紙にて提示）

8. カテゴリー生成（別紙にて提示）

9. 結果図（別紙にて提示）

10. ストーリーライン

インターンシップ履修希望者は、①コンテンツビジネスの理解、②仕事上の役割に関する理解という「仕事理解意欲」、また、③自らの専攻と現場の関連性、④将来のキャリア選択の具体化という「キャリア設計意欲」を持ち、【高い参加動機】（インターンシップへの高い参加意欲の醸成と参加目的の具体化）のもと、インターンシップに参加している。

実地研修では、【状況的学習】と【省察的学習】が行われており、両者は相互補完的な関係にある。【状況的学習】とは、インターンシップというさまざまな制約状況の中から、特有の言語や非言語を通じて、主体的あるいは偶発的に学習し、周辺の業務から次第に中核的業務を任されるようになり、業務の一部のみならず、組織を俯瞰して捉えることができるようになることである。状況的学習では、⑤コンテンツビジネスの理解深化、⑥仕事上の役割の体得、⑦業務プロセスの習得という「目標達成」と、⑧現場感覚の知覚、⑨大学と現場の相違感悟という「実践感覚からの学習」が行われている。一方、【省察的学習】とは、インターンシップでの行為を省察的に捉えることにより、学習が促されることである。省察することにより、⑪積極性の欠如、⑫社会人としての自覚という「肯定的省察からの

学習]が行われ、⑬対人関係構築、⑭現場言語の獲得と意思疎通、⑮共感や納得の獲得という[コミュニケーションの重要性の自覚]がされている。言語の獲得と媒介を通じて概念の再構築が行われているものと考えられる。

如上の学習を通じて、【自己評価】(インターンシップの自己評価)が行われている。自己評価は、実地研修中に行われる場合もあるが、事後研修における省察によって行われる場合もある。自己評価は、⑮専門知の現場での応用や⑯経験知の現場での応用によって、[自信の獲得]に結実する群と、⑰制約された時空間での学習の限界、⑱理想と現実の乖離と困惑によって、[自信の喪失]に陥ってしまう群とに分岐する。

上記の自己評価の結果、【キャリア・アイデンティティの醸成と混乱】(将来のキャリアにおける自己確信あるいは自己葛藤)に分岐する。⑲キャリア・アイデンティティが醸成された学生は、自らのキャリアデザインを肯定的に捉えて展望を見出しているが、一方で、⑳キャリア・アイデンティティが混乱した学生は、改めて自己探索を続けている。インターンシップを通じてキャリア・アイデンティティが混乱した学生に対して、どのような支援が可能なのか、これはインターンシップを通じたキャリアデザインの課題の一つとして指摘できる。

11. 方法論的限定の確認

本研究によって生成された理論は、コンテンツ産業におけるインターンシップに参加した修士課程の学生に限定して適用されるものであるが、特有の言語や非言語を通じたコミュニケーションが重要な領域におけるインターンシップにおいても適用可能であるものと思われる。しかしながら、収集されたデータは、インターンシップ終了後に、インターン自身によって省察され、言語化された内容であり、インターンシップを通じた学習過程を捉えるには、状況や特定他者の具体化の観点から限界がある。また、【高い参加動機】に至る理論説明・予測という観点においては、収集されたデータの限界から、実践者でもある研究者の経験主義的アプローチで補完せざるを得ない。このような限界を克服していくためには、インタビュー調査を通じたデータの収集が必要であることを認識している。

12. 論文執筆前の自己確認

①なぜ、何を明らかにしようとしたのか。

インターンシップ研究をサーベイしてみると、教育者からのアプローチ、例えば、制度研究、評価分析、意識調査などが、事例研究、統計的分析などにより、多く蓄積されてきたが、学習者からのアプローチは十分に行われてこなかった。また、インターンシップは極めて実践的な領域であるにもかかわらず、データに密着した理論生成や予測可能な理論生成はあまり行われておらず、研究レベルにおける【研究する人間】と【応用者(実践者)】とのインタラクション(評価・検証)は、十分になされてきたとは言い難い。このような背景から、教育者からのアプローチではなく、学習者からのアプローチから、コンテンツ

産業でのインターンシップに参加した修士課程の学生を分析対象として、インターンシップにおける彼・彼女らの学習過程について、M-GTA を用いて分析することにより、教育的示唆を得ることを目的とした。

②何が明らかになったのか。

インターンシップへの高い参加動機づけ、目的の明確化がなされることにより、状況的学習と省察的学習が相互補完的に行われていた。専門知や経験知が現場で応用されることにより、自信の獲得につながっていた。自信の獲得は、キャリア・アイデンティティにも影響を与えていた。これらの事実発見から、次のような教育的示唆を得た。とりわけ事前研修においては、状況の中からいかに学習するか、行為の中からいかに学習するかについて、学習者の洞察を深めることが重要である。また、事後研修においては、省察の中からいかに学習するか、学習者の視点に立った学習環境のデザインが必要である。

③何が明らかにされなかったのか。

インターンシップにおける社会的相互作用は、状況や特定他者との中でみられるものであるが、どのような状況で、どのような特定他者と相互作用が行われているかについては、必ずしも具体的化することはできなかった。状況については、インターンシップ期間中、インターンが毎日記録した「研修日誌」をみればある程度把握できる。しかし、特定他者については、インターン先指導担当者が中核人物となるが、その他の人物（例えば、指導担当者以外のスタッフや同期インターン等）も存在するため、インタビュー調査による追跡調査が必要である。とりわけ、コンテンツ産業におけるキャリアディベロップメントにおいては、人脈形成が大きな影響を与えていることが明らかにされている。したがって、フォーマルな学習のみならず、インフォーマルな学習の解明も必要である。

13. 主な質問・意見

- ・インターンシップの日数や業界の違いによって影響を受けるのではないか。
- ・インターンシップの前後で何が違うのか。
- ・学習と教育の違いは何か。
- ・分析焦点者と分析対象者との違いは何か。
- ・データをどのように収集し、どのように分析したのか。
- ・既存の理論が M-GTA による理論生成よりも先行しているのではないか。
- ・コンテンツ産業ならではの特徴は何か。
- ・データは素材である。説明力のある理論を構築するのが M-GTA である。
- ・分析テーマを明瞭にした方がよい。

14. 感想

さまざまなご意見をいただき、多くのことに気づくことができました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。とくに、分析テーマと分析焦点者の設定、リサーチデザインの

重要性を再認識しました。分析テーマや分析焦点者が明確に定まっていないと、説明力のある理論は生成できないということを学びました。今回は限られたデータの限界のため、今後は他の資料を活用したり、インタビュー調査などの追跡調査を行いながら、リッチなデータをもとに再分析していきたいと思います。

とりわけスーパーバイザーをお引き受けいただきました佐川様には、大変丁寧にご指導・ご助言を賜り、深く感謝申し上げます。今後とも、皆様からのご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願いいたします。

【SV コメント 佐川佳南枝（立教大学）】

藤原さんの今回のデータは、もとより制約のあるデータであり、ご本人もそのことを自覚された上での分析でした。インタビューであれば、「なぜ、そのように思ったのですか？」「具体的にいうとどのようなことでしたか？」と問いなおしたり深めたりすることができます。しかし今回のデータは報告書という形ですべて本人の中で整理され文章化されています。しかしこれらを見てみるとディテールに富んだリッチなデータとはいえないものの、具体的なことも述べられており、このような限られたデータからでも何らかのものが導き出せるのではないかと思います。

発表の中で最も気になったのはレイヴとウェンガーや、エリクソンなど既存の理論にひっぱられた概念化や理論化が行われていることでした。そのために分析結果も、比較的単純なきれいな形でまとまってしまったものと思われます。それらの理論はひとまず忘れてデータと向き合い、分析焦点者であるコンテンツ産業のインターンシップ参加者たちがそこでどのような経験をしているのかを grounded on data で分析していくことが必要だと思いました。そのためには的確な分析テーマを決定することが重要になってきます。

分析テーマは「コンテンツ産業におけるインターンシップを通じた学習過程」となっていますが、データを見ると、その業界で働くことを前提とした学習であると同時にその業界で自分がやっていけるのか、自分とその業界の適合性を確認していく作業を同時に行っているとみることができるのではないのでしょうか。

他の業界のインターンシップや実習とはどのように違うかという観点では、このコンテンツ産業自体では、感性とかノリとか感覚的なものが重要であり、その現場独特のコミュニケーション特性や言語化能力といった独特なカルチャーを体得することが重要な学習の要素であるようです。

幸い追跡的にインタビューも可能なようですので、今回の研究は探索的なものと位置づけて、今後の研究を深めていければ、興味深い研究となると考えられます。今後の展開を期待しております。

◇近況報告:私の研究

若林功（職業能力開発総合大学校 能力開発専門学科）

障害のある方への職業リハビリテーション・就労支援を専門に研究・実践をしている若林という者です。さて障害者の就労において、就職先の職場が見つかるだけでなく、働き続けられること（職場定着など）も重要です。そして、働き続けるためには障害者本人の努力や、支援者・家族からの本人への働きかけに加え、職場の同僚や上司からの働く障害者へのサポートも重要です。この上司・同僚のサポートは、障害者就労支援の専門家が介入するまでもなく自然に発生する場合がありますが、専門家が職場に介入・調整しサポートが発生する場合があります。また後者には、比較的スムーズに進む場合や、専門家が苦労の末、発生する場合、さらには苦労してもなかなか発生しない場合があります。いずれにしても、職場からのサポートが形成されるプロセスには、「障害者」「職場の上司・同僚」「専門家」等の間に複雑な相互作用が生じていることが考えられます。

この上司・同僚のサポートからのサポートが専門家によって引き出される過程についての研究はあまり見られませんでした。一方で、実践レベルでは何とか職場のサポートを引き出そうとする努力が日々行われています。この興味深くも、ドロドロした(?) プロセスを何とか研究したいと思っていたところ、海外の文献でグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究を読んだことがきっかけとなり、M-GTAに辿りつきました。

実はM-GTA研には3年程前から参加させていただいており、専門家へのインタビューはある程度行ったのですが、（言い訳になってしまいますが）その後個人的なライフイベントがいくつか重なったせいもあり、なかなか分析が捗っていませんでした。ただ、時間をかけても、ネタが古くなってしまうという危機感もあり、まずはこの研究会で報告させていただき、また学会等でも発表したいと考えております。M-GTAの認識論の基盤にもなっている訳ですし。。。と、ここまで書いていたら少し焦ってきました。よろしくお願いいたします。

.....

宇津木奈美子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 博士後期課程）

私は日本語を母語としない子どもを対象に教科学習支援をしています。現在、日本には日本語学習が必要だとされている子どもが約2万人いると言われています。この子どもたちの抱える問題として、日常会話は話せるのに、授業には全くついてこれないという学習上の問題があると言われています。一方で、日本での滞在が長くなると、子どもは母語を忘れ、親子のコミュニケーションができなくなるという問題もあります。

このような状況を受け、支援に、子どもの母語を積極的に取り入れ、日本語のみならず、子どもの母語を保持育成し、教科の内容理解を可能にしようとする方法を取り入れてきま

した。具体的には、子どもの母語が話せる支援者（外国人）と、日本人支援者がペアとなり子どもの教科学習支援を行っています。この支援の実践では、子どもの母語力や日本語力に関する研究がなされており、その有効性があげられています。しかし、外国人支援者の立場に立った研究はまだまだ少なく、支援で具体的に何をすればいいのか、あるいは支援そのものをどのようにとらえていけばいいのかという課題があげられていました。

そこで、修論では、3人の中国人支援者を対象に、M-GTAを分析の枠組みとして、子どもの母語を活用した学習支援に対してどのように意識が変容したのかを分析し、その要因を探りました。当時（3年前）、対象となる支援者が3人しかおらず、はたしてM-GTAが分析方法として妥当なのかということで悩みました。また、一方でなぜ、質的研究で対象者の数にこだわらなければならないのかというジレンマもありました。当時を振り返ると、分析方法にこだわるあまり、本来の研究の目的を見失っていたように思います。そこで、研究会で木下先生に、対象者の人数について質問したところ、人数自体が問題ではなく、なぜその対象者なのか、その理由がしっかりあればいいとおっしゃっていただきました。そのアドバイスに背中を押されて、なんとか修論を書き終えることができました。

現在ではさらに実践が進み、外国人の支援者の数も増えてきました。研究結果をどのように現場に還元していくのか、どういう読み手に何を伝えるのか、ということを見失わないようにこれからも実践研究を行っていきたいと思います。

.....

伊藤文子

研究会の皆様、お世話になっております。

研究会では、9月に構想発表をさせていただき、研究会の皆様からご意見やご助言、ご指導をいただき、私が研究をすすめていくのにわからなかったことや、どこに自分自身がつまづいているのかについて理解することができました。発表の後、しばらくはデータに向き合うことができませんでしたが、研究参加者からの「私たちのことを研究に役立ててほしい」「私たちのことを沢山の人の人になってほしい」などのことばに励まされ、落ち込んでいた状況から抜け出すことができました。それから、もう一度データに戻って分析テーマの絞り込みから始め、修論の締め切りが近づく焦りの中でやっとの思いで書き上げました。

論文の審査の際には、M-GTAの手法について緻密に表現されており、概念名や定義は妥当であると評価を受け、M-GTAの夏合宿や研究会に参加させていただいた成果であったと思います。ご指導いただいた研究会の皆様にはとても感謝しております。

今は、専業主婦をしながら、修論を学会発表や学会誌への投稿にむけて準備をしているところです。今後、研究会でも発表させていただき、ご指導やご助言をいただきたいと思っておりますので、その時はよろしくお願いいたします。

.....

◇第 50 回研究会のご案内

【日時】 8 月 1 日（土） 13：00～18：00、

【場所】 立教大学（池袋キャンパス）

* 教室は後日、ご案内します。

プログラムは現在検討中です。研究発表希望者を募集中です。

参加登録は <https://ssl.formman.com/form/pc/b3CxMmk5a5Nz3ngQ/> からです。

今回は会員の参加を優先し、余裕があれば後日 HP で非会員の参加を募ります。

◇ 編集後記

・今朝はものすごい雨音で早朝に目が覚めました。今、山陰の中山間地で聞き取り調査を行っています。先週は天気もよく、田植えの後の青々とした田圃や卯の花の咲く山道を清々しい気持ちで訪問先へ向かっていました。今週は一転して強い雨が降ったりやんだり、こんな天気の日には過去の集中豪雨による災害の記憶も語られます。語られる半生はそれぞれに重みにみちいて、帰ってしばらくはその語りに取り巻かれてぐったりと疲れています。それを言い訳にしてはいけないのですが、今回のニューズレターの編集がすっかり遅れてしまいました。

・今回の研究会より新しい試みで第一部と第二部に分けて、第一部では SV とデータ提供者とのやり取りの中で分析の要点が示されるかたちになっています。これから分析に取り組もうという方たちにも学習が進んだ方にもよい学びの機会になったのではと思います。このニューズレターで追体験していただければ幸いです。

・前号のニューズレターでお知らせしたように「出張ワークショップ」の締切は6月 30 日です。すでにいくつかお申込みがあるようです。検討されているグループはお急ぎください。 佐川記